『和歌山信愛大学教育学部紀要』抜刷
第７巻　2026 年３月発行

不登校児への支援ボランティアの開始動機と継続理由

村上　凡子

【研究ノート】

和歌山信愛大学教育学部紀要　Vol.7, pp.49-54, 2026

不登校児への支援ボランティアの開始動機と継続理由

Motivations for Beginning and Maintaining Volunteer Support for Students Experiencing School Refusal

村上凡子

本報告の目的は、不登校支援ボランティアへのインタビューを基に、活動開始の動機と継続要因を究明することである。質的内容分析法を用いた結果、開始動機として「支援機関への関心と不登校児支援に関する利他的動機」、「活動への不安と意欲という葛藤的動が機」、継続要因として「子ども達との関わりをもとにした楽しさの共有」、「子ども達との関わりから得られた信頼関係や絆の深まりの実感」、「学生自身の肯定的な心理的感覚」といったカテゴリーが抽出された。

キーワード：不登校支援、ボランティア、開始動機、継続要因

1　研究の背景と目的

近年、不登校児童生徒数は増加の一途を辿っている。最新の情報においては不登校の小・中学校の児童生徒数が346,482 人であることが報告され、過去最多となった。

本報告はこのような状況の下、ボランティアの立場で不登校の子ども達への支援活動に携わった学生を対象として、ボランティア開始の動機、及び継続の要因に焦点を当て究明することを目的とする。

本報告において不登校という用語を用いる場合は、文部科学省による「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため年間 30 日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」という定義を基にすることとする。

我が国における不登校支援のボランティアに関する先行研究は多くなく、不登校支援に携わった学生の意識に関する報告が１つある（松本・杉本・隅元, 2008)。そこでは、ボランティアの学生を対象とした質問紙調査が実施され、〈ボランティアの役割〉、〈子どもへの関わり〉、〈ボランティアの適性〉といった３つの因子が抽出され、ボランティア学生は、これらの意識を抱いていることが示されている。他の学生と比較した結果、不登校支援のボランティア活動に従事する学生は、ボランティアの役割を把握し、子ども達がより楽しく過ごせるように考えて活動する傾向が高いことが示されている。

筆者は、不登校支援のボランティア経験者で研究協力に応じたメンバーにインタビューを実施した。インタビューについては、どのような意識を抱きながらボランティア活動をしてきたかについての振り返りを行った。本報告は、インタビューの全容のうち、報告の第一報として活動開始の動機と継続の要因に関する語りの部分を分析し、その結果を報告するものである。

本報告で得られた知見に基づいて、筆者と同様に学生の調整役を担う立場にある教員が学生の心理を理解して、学生と関わることができると考える。また、学生への関わりにおける知見の有用性は、不登校支援のボランティアにとどまらず、様々なボランティア活動に取り組む学生への関わりに広く示されることが期待できるであろう。

2　ボランティア活動

本節ではボランティア、あるいはボランティア活動とい

う用語について意味を確認し、研究協力者の活動実態について述べる。

2.1　ボランティア活動の定義と原則

ボランティア活動について、本報告では国立教育政策研究所による報告書内の馬場（2015）による定義を拠り所とする。それは、「個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献すること」というものである。また、ボランティア活動に係る四つの原則が広く知られている（馬場，2015）。第一は自発性（自由意思）の原則である。他者から強制されるものではなく、自発的意思に基づいて行われるものであるということを意味する。第二は無償性（無給性）の原則である。活動の見返りとして金銭的な報酬など物的利益を期待すべきではないという原則である。第三は公共性（公益）の原則である。活動が特定の人たちの私益に繋がるものではなく、社会や公共の福祉に役立つべきものであるという意味をもつ。第四は先駆性（開発、発展）の原則である。活動が画一的に取り組まれるだけではなく、社会の発展や開発をリードするという考え方である（馬場，2015）。

2.2　本報告におけるボランティアの活動実態

研究協力者のボランティアとしての活動場所は、公的な機関（以下、X機関と記す）である。X 機関では学習の時間、活動の時間が設けられ、午前と午後の間に昼休憩の時間がある。ボランティア活動において、学生は曜日と時間帯を個々に選択し、原則として週に一回 X 機関に出向き、そこに通う子ども達(通級生と表す場合がある)と関わる。筆者は、その活動の連絡調整の役を担う立場にある。

3　方法

3.1　調査の対象と手続き

本報告においては、調査の方法として先述のとおり、インタビュー法を採用した。「インター・ビュー」とは共通に関心をもつテーマについて二人の見解のやりとりとされる（Kvale，2007）。筆者自身が聞き手の立場である。筆者と協力者との間の「共通に関心をもつテーマ」は不登校支援のボランティアである。筆者の問いは、先述の研究の目的で示したとおりである。協力者の側は自らが体験したことやその事象についての意見、また自らが置かれている状況を語る（山口，2023）。筆者と協力者との間で生まれるやりとりに学術的な価値が見出せると捉えられる。

次にインタビューの方法について述べる。インタビューは、①非構造化インタビュー、②半構造化インタビュー、③構造化インタビューの三つに分けられる。①～③に移行するにつれて形式が固定化し、テータ収集の手順が標準化するという特徴がある。インタビューにおいては，その目的に応じて望ましいとされる構造化の程度を決めることが求められる（山口，2023）。

本報告においては上記 3 つのうち半構造化インタビュー法と呼ばれる方法を採用した。その特徴は、事前に質問内容や順番はある程度決められているが、厳格なものではなく、緩やかに定められた質問で進行される点である。採用した理由は、研究の目的に沿った項目について語りが生成される質問を準備でき、研究協力者が意味ある経験を選択しながら語ることが担保されている（Flick，2011）からである。

協力者の人数は 6 名である。調査への協力に当たり、研究計画書を示しながら口頭で、研究の目的と意義、研究に協力することによるメリット、デメリットなどについて説明した。研究に協力することによってもたらされるメリットとして、筆者とのやりとりを通して、活動を振り返り、個人としての変容を確認することができる点を伝えた。また、振り返りの内容を、今後出会うであろう様々な困難を抱えた人々への関わりに役立てることができることも伝えた。デメリットとして、時間と労力が消費されることがあり、さらに協力しないことによって不利益を被らないことも伝えた。説明の後に協力の意志がある場合、同意書に署名を求めた。6 名全員から同意書が提出された。

個々の活動期間は約 1 年～4 年であり、総体としての期間は 202X 年～202（X+3）年である。インタビューの時期は、卒業を控えた 202（X+3）年度末であり、一人当たりの所要時間は 40 分程度である。大学内の秘密が保たれる講義室で実施した。

協力者すべてに共通しているのは、必修科目のボランテ

ィア実習としての活動に該当しない期間に活動をしている点である。その期間の活動は、他から指示を受けたものではなく、自発性が発現したものとして捉えられる。協力者のボランティア活動は、先述の原則のうち、第一原則の自発性、第二原則の無償性に当然ながら当てはまっている。活動過程では、X 機関に通う子ども達との交流が生成する。どのような事柄がボランティア活動を継続させたのかという問いに対する答えが、その交流の様相にあるのではないかと予測を立てた。第三の原則である公共性に関しては、教育分野での活動であり、社会の公共のために資する活動として位置づけられる。第四の原則については、最後のまとめのところで検討を加えたい。

なお、本報告は筆者の所属する和歌山信愛大学研究倫理審査委員会の承認を受けている（審査番号：信大倫審 242202）。

3.2　インタビューの内容と方法

インタビューに際し，協力者とのやりとりの成立を重視しながら行うこと，また自発的な語りに制限を加えず，共感的に傾聴することに努めるという方針を設定した。

本報告に関するインタビューの項目は以下の通りである。「みなさんに共通しているのは、ボランティア実習の単位に関係のない時期に活動を続けている点です。ボランティアを開始した動機やきっかけ、そして活動を継続した理由を聞かせてください。」

インタビューについては対象者の事情に応じて、対面あるいはオンライン会議システムツール（Zoom）により実施した。その内容は、協力者の了承を得て IC レコーダーまたは Zoom の記録機能を使用して録音した。オンライン会議システムツールでは、協力者と筆者ともにビデオオンの状態で進めた。録音データから自動的に作成される逐語録に関して、誤変換や文法的な側面から修正し、文章を整えたものを分析対象とした。逐語録を作成する際に、氏名はアルファベットで示し、ボランティア先の機関名は X 機関に変換した。

3.3　調査内容の分析方法

質的内容分析（Elo, & Kyngäs, 2007）を採用し、逐語録のデータを分析した。質的内容分析は演繹的方法と帰納的方法に分けられる。本報告は後者の帰納的方法を採用し、協力者の語りの内容を分析した。帰納的方法は、得られた情報から問いに対する知見を探索的に見出すものである。

分析の第一過程は逐語録について、協力者の立場に立ち、主観を排して読み込む過程である。第二の過程がデータの切片化である。これは、データを意味のある最小限の単位で区切る作業をさす。第三の過程がコーディングの作業である。切片化されたデータの内容を他者が見ても了解可能な言葉で表すことを意味する（山口, 2023）。その情報はコードと呼ばれる。協力者の語りに込められた意味を読み取り、それをやや抽象度の高いレベルで言語化する。第四の過程において、複数のコードの情報から帰納的にいくつかのまとまりを見つけ、サブカテゴリーを作成する。最終の第五の過程では、複数のサブカテゴリーからカテゴリーを作成する。

質的内容分析に関して分析の妥当性、確証性を担保するため、筆者は先述の第一から第四の過程に関して、質的研究の専門家からスーパーバイズを複数回に渡って受けた。

4　結果と考察

4.1　ボランティア開始の動機

表１　活動開始の動機に関する分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの例
支援機関への関心と不登校児支援に関する利他的動機	X機関の支援に対する関心	大学進学後におけるX機関の情報の把握
		X機関の活動に参加することへの意欲
		実際に行われている支援への関心
	不登校問題への関心と不登校児支援に対する意欲	不登校児への支援に関する意欲
		不登校支援への以前からの興味
		大学の授業で学んだ不登校問題への関心
	子ども達に良い経験をもたらし、子どもにとって安心できる存在になりたいという動機	子ども達にとって自分が安心できる存在になれたらと良いという願い
		子ども達にとって良い経験になれば良いという思い
活動への不安と意欲という葛藤的動機	体験の試みへの動機	「どんな所だろう？」という興味から一度、経験したいという思い
	子どもとの関わりに関する不安	子ども達どんなふうに関わるのかについての不安
		子ども達に実際会った時の不安

分析の結果、カテゴリー数は２、サブカテゴリー数は５、コード数 21 が抽出された。表 1 に、カテゴリー、サブカテゴリー、各サブカテゴリーに該当するコードの例を２～

３示す。ボランティア開始の動機のカテゴリーとして、①【支援機関への関心と不登校児支援に関する利他的動機】、②【活動への不安と開始の葛藤的動機】の２つが帰納的方法により見出された。

4.1.1　不登校支援に関する関心と学びの意欲

このカテゴリーを構成するサブカテゴリーの一つ目は、〈X 機関の支援に対する関心〉である。「大学進学後に不登校支援のための機関があることを知り、実際にどのような支援を行っているのかと知りたい」という動機である。換言すれば、X 機関においてどのような環境で不登校の子ども達に支援を展開しているのかについての関心が高まったという点である。そのことが開始の動機となったと捉えられる。

二つ目は、〈不登校問題への関心と不登校児支援に対する意欲〉である。「不登校児の支援に携わりたい」という願いが示されている。協力者が活動を始めた時期は、我が国において不登校の児童生徒数が大きく増加する時期と重なっている。そのため、大学の複数の授業でその事実を知る機会もあり、不登校という教育の課題への関心が喚起されていたと推察される。

三つ目は学生自身が抱く〈子ども達に良い経験をもたらし、子ども達にとって自分が安心できる存在になれたらと良いという願い〉である。ここには、不登校の子ども達に実際関わることを想定し、学生自身が設定した関わりの具体的な目標が示されていると考える。自らがボランティアとして行動を起こすことにより、不登校の状態にある子ども達のために役に立てることがあるという利他的な心理が動機となっていることが読み取れる。

4.1.2　活動への不安と意欲という葛藤的動機

第二のカテゴリーを構成するサブカテゴリーの一つ目は、〈体験の試みへの動機〉であり、機会があるのなら一回 X 機関に行ってみようという素朴な動機が示されている。その動機と同時に、当初は〈子ども達とどのように関わればよいのか不安〉を抱いていることが示されている。不安を抱えながらもまず X 機関に出向き、活動してみようという意欲がうかがえる。活動への不安と意欲が葛藤状態にあったと推察される。

以上により、開始の動機に関して帰納的に見出されたカテゴリーから、大きく二つに分けられることが示された。一つ目は不登校への関心をもとにした利他的動機である。不登校の状況に置かれた子ども達のことを思い、役に立ちたいという内面が動機となっている。二つ目は不登校児への関わりについての不安と X 機関に行ってみようといういわば相反する葛藤的動機である。不安を抱えている状態で、自身の中で葛藤を乗りこえて一歩踏み出してみたという協力者の当初の心理的葛藤がうかがえる。

4.2　ボランティア継続の要因　結果と考察

カテゴリー数は３、サブカテゴリー数は 7，コード数 54 が抽出された。活動継続の要因として、①【子ども達との関わりをもとにした楽しさの共有】、②【信頼関係や絆の深まりの実感】、③【学生自身の肯定的な心理的感覚】が見出された。表２に、カテゴリー、サブカテゴリー、それぞれに該当するコードの例を２～３示した。

4.2.1　子ども達との関わりをもとにした楽しさの共有

第一のカテゴリーを構成するサブカテゴリーの一つ目は、〈子ども達との対話や活動の楽しさ〉である。「子ども達と喋ることを楽しんだ」ことや「純粋に楽しいから続けた」というコードの例が示すように、対話や活動から楽しさを味わっていたことが読み取れる。「お互いに、人と人としてプレイした」というコードから、支援する側の学生と支援される側の通級生という立場ではなく、子どもと協力者が対等な関係で活動したことが読み取れる。子ども達も学生のことを一人の人として見ており、共に活動する相手として認識していることがうかがえる。対等な関係での応答性豊かなやりとりが生まれていたと推察される。

二つ目は〈互いの楽しさの共有〉である。「自分が楽しみ、通級生が楽しんでいるのを見て、また楽しくなる」というコードにみられるように、子ども達と関わることによって協力者は楽しさを体感し、活動の場所が学生と子ども達にとって楽しさを共有する場であったと推察される。

このカテゴリー全体から、協力者が子ども達との関わりによって楽しさを味わえたことがわかる。人との関わりが肯定的な感情である楽しさを生み出すという過程が示されている。その過程を体験することを協力者は積み重ねていった。この体験過程自体に内包される心理が活動の継続要

因として作用したことがうかがえる。

表2　活動継続の要因に関する分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの例
子ども達との関わりをもとにした楽しさの共有	子ども達との対話や活動の楽しさ	私も子ども達と喋ることを楽しんでいた。 義務感ではなく単純に楽しいからボランティアを続けた。 通級生にとって私は学生という意識はなく、お互いに人と人としてプレイした。
	互いの楽しさの共有	自分も楽しんで、通級生が楽しんでいる姿を見て、また楽しくなる。 自分も通級生も、楽しいが一緒になっているかもしれない。
子ども達との関わりから生まれた信頼関係や絆の深まりの実感	子ども達の姿の変化から実感した信頼関係と絆の深まり	活動を通して信頼関係が強くなると、学習の時間も本音でわからないと言ってくれる。 楽しみにしてくれてる子もいるし、私の名前も覚えてくれている子もいることで、続けたいという気持ちがあった。 子ども達との人間関係で培われた信頼を実感できた。
	信頼関係の実感と嬉しさ	徐々に子どもそれぞれとと信頼関係が出来てくることを実感できるのが嬉しい。 信頼関係がないとできない経験が嬉しかった。
学生自身の肯定的な心理的感覚	子ども達のために役立っているという自己有用感	私たちとの交流が子ども達にも意味があり、役に立っていることがあるという思い 自分がX機関に行くことによって、子ども達に何か役に立つことがあればと良いと思い、続けた。
	自己成長のために意味のある経験	活動により大変なときも前向きな気持ちになれた。 ボランティア活動が自分のためになると思って続けたきた。
	子どもとの関わりで実感した居場所感覚	自分の居場所になっていたのかもしれない。 純粋に子ども達との関わりが楽しく自分の居場所であったので、活動を継続してきた。

4.2.2　子ども達との関わりから得られた信頼関係や絆の深まりの実感

第二のカテゴリーを構成するサブカテゴリーの一つ目は〈子ども達の姿の変化から実感した信頼関係と絆の深まり〉である。「学習の時間も本音でわからないと言ってくれる」、学生に会うのを「楽しみにしている」姿や学生の「名前を覚えている」といった子どもの姿に信頼関係の深まりを実感したことが見て取れる。二つ目のサブカテゴリーは、〈子ども達との関わりから生まれた信頼関係の実感と嬉しさ〉である。個々の子ども達との間に「徐々に信頼関係」が成立したことを実感し、そこに嬉しさを感じ取った。その嬉しさがボランティア活動を継続するための促進要因となっていることが読み取れる。

このカテゴリーには、子ども達との間の信頼関係が活動過程で一層深まり、そのことを子ども達が表す行動や言動から実感していたことが示されていると考える。

4.2.3　学生自身の肯定的な心理的感覚

このカテゴリーの一つ目のサブカテゴリーは、〈子ども達のためになっているという自己有用感〉である。「子ども達のために役に立っていることがある」、「子ども達に何か役に立つことがあればという思い」というコードから、まさに自己有用感を抱きながら日々活動を継続していた心理が示されていると捉えられる。また、〈自己成長のために意味のある経験〉という二つ目のサブカテゴリーを構成するコードから、活動が自分のためになることや前向きな気持ちになれたことが読み取れる。学生は自己の変化、成長にとって意味あるものとして活動を位置づけていると考えられる。三つ目のサブカテゴリーは、〈子ども達との関わりで実感した居場所感覚〉である。学生は、自分たち自身にとって、X機関が子ども達との関わり、信頼関係が生まれる「居場所」として機能していた可能性を述べている。物理的な居場所にとどまらず、心理的な居場所感覚を得られたのは子ども達との関わりが楽しいからであると振り返っている。居場所とは、安心して居心地よく居られる場とされる（中藤，2013）。学生はX機関をこのような場として感じていたと推察される。

これらの見出されたカテゴリーから、学生自身が活動を通して、自己有用感、自己成長感、居場所感覚といった肯定的な心理的感覚を得ていたと捉えられる。学生自身の内面の変化、肯定的な心理的感覚も活動継続の要因となったと推察される。

5　まとめと今後に向けて

本報告の目的は、不登校の子ども達への支援ボランティア活動に携わった学生を対象として、ボランティア開始の動機及び継続の理由についての意識に焦点を当て、検討することであった。

当初の活動開始動機に関しては、不安を抱えながらも不登校全般の課題や不登校児への支援に対する意欲が動機となっていたことが示された。これに対し、活動開始後は、子ども達との関わりにより得た楽しさ、築いた信頼関係が活動継続の大きな原動力になったことが示唆された。協力者と子ども達との間の交流で創出された感覚が作用しているといえるだろう。また、協力者自身の変容や内面に生じ

た肯定的な心理的感覚も活動継続の要因としてはたらいたと捉えられる。活動を通して、人と人との関わりが生まれ、信頼関係の成立を協力者一人ひとりが実感していた。

子ども達の側に視点を向けると、協力者との関わりを楽しみ、信頼関係を築いていたと認識しているのかどうかに関しては、明確な検証をすることはできない。しかし、本心を語り出し、協力者の来訪を楽しみに待っている子ども達の姿から、子ども達にとっても協力者が信頼を寄せる対象であったと推察される。

活動の際に子ども達と協力者との関係に関しては、対等性が生じていたと推察される。筆者は過去に支援する側と支援される側という二者で構成される環境の在り方として、二者間でやりとりが連続して繰り返し生まれる応答的環境が社会性の向上に効果があるという点を報告した（村上, 2010）。本報告における子ども達と協力者の間にもそのような応答性豊かな環境が発現し、そこで醸成された楽しいという感情、信頼関係がボランティア活動の継続に強く作用したと考えられる。

ボランティア活動の原則の一つとして、先述のとおり先駆性がある。本報告における継続要因の分析からは他に先駆けて開発的に実践されたという面を明確に読み取ることはできない。しかし、対象の子ども達と信頼関係を築き、自発的に継続した活動自体に、不登校支援という現代の教育を巡る課題解決への貢献としての意味が見出せると考える。今後の分析において、今回対象としなかった活動過程で大切にしたこと、当事者に代わり広く伝えたいことについて分析を進めたいと考える。

謝辞

最初に本報告を進めるにあたり、貴重な時間を割いて、快く研究への協力に応じてくださった協力者の皆さんに、心から感謝申し上げます。また、本研究を進めるにあたり、東京医科大学山口拓允先生に研究計画の段階から、結果の分析手法に至るまで多大なご指導、ご助言をいただきました。ここに深く感謝の意を申し上げます。

本報告は、和歌山信愛大学共同研究学長裁量予算の助成を受けて実施した研究をもとに執筆したものである。

付記

引用文献

中藤信哉（2013）「心理臨床における『居場所』概念」『京都大学大学院教育学研究科紀要』 第 59 号 361-373,

馬場裕次郎（2015）「生涯学習社会におけるボランティア活動の意義と役割」国立教育政策研究所文書 https://www.nier.go.jp/jissen/training/h26/shuji_b/pdf/0126_02.pdf

松本剛・杉本愛奈・隈元みちる（2008）「不登校支援における学生ボランティアの意識調査：NANA っくす活動をとおして」『兵庫教育大学研究紀要』 33 号 63-71

村上凡子（2010） 「高機能発達障害児への応答的環境の構成とその効果についてー『環境としての人』との相互作用を通してー」『人間環境学研究』, 8 号, 15-23

山口富子（2023）『インタビュー調査法入門―質的調査実習の工夫と実践－』 （株）ミネルヴァ書房

Elo, S. & Kyngäs, H.(2007) The qualitative content analysis process Journal of Advanced Nursing 62(1), 107–115 doi: 10.1111/j.1365-2648.2007.04569.x https://www.brown.uk.com/teaching/HEST5001/elo.pdf

Flick, U.（2011）小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子（訳）『新版 質的研究入門 〈人間の科学〉のための方法論』 春秋社

Kvale, S.（2016）能智正博・徳田治子（訳）『質的研究のための「インター・ビュー」』 新曜社